

そこに待っている人がいる

2010年1月、カリブ海に浮かぶ国ハイチでマグニチュード7.0の大地震が起こった。首都ポルトープランスは壊滅状態。被災地から助けを求める人たちの声にこたえ、国際緊急援助隊の医療チームが地球の反対側に飛んだ。



JDRの診察を待つ人々。数百人にも及んだために、混乱が起きないように警備員を配置するなど安全管理も徹底した

首都が壊滅状態
支援が届かない現場へ

カリブ海に浮かぶ国「ハイチ」。中南米で最も貧しい国の一つといわれるこの国。政府機能もぜい弱で、基礎的なインフラも十分に整備されていない。

2010年1月13日6時53分（日本時間）、マグニチュード7.0の地震がこの国を襲った。震源地は、首都ポルトープランスの南西15キロの地点。国家サービスが集中している首都は壊滅状態。大統領官邸も、国会議事堂も、病院も、住居も、ほとんどすべてが破壊されてしまった。

JICAの国際緊急援助隊（JDR）事務局にも、そのニュースは飛び込んできていた。しかし、なかなか正確な情報が入ってこない。本来、主な情報源であるべき現地の日本大使館が被災して



診察を待つ人たちの脈を測る室田看護師。「JDRの資機材で骨折用の固定器具を作ったり、ギブスを自分でも外せるようにあらかじめカットするなどの工夫をしました」

外傷患者の腹部超音波検査をする畑医師。「JDRに参加した中で、これほど重症患者が多いことはなかった。JDR医療チームの体制を見直すターニングポイントになったと思います」

しまったからだ。

ハイチ政府の要請を受けて、日本政府はJDR医療チームの派遣を決定。25人の隊員が現地へ向かったのは16日。日本航空のチャーター便でアメリカのマiamiへ、さらに自衛隊機で首都に到着するまで丸2日。「早く被災者を助けたいと、機内では興奮状態であり眠れませんでした」と、副団長を務めた畑倫明医師（現・奈良県立医科大学講師）は振り返る。

現地に入ると、息をのむほど壮絶な光景が広がっていた。レンガ造りの家はほとんど全壊、辺り一

現地の看護学生と共に
命と向き合う

面ががれきの山。人々は通りにあふれ、治安も安定しない状態だった。すでに活動を始めていた調査チームにより、JDRの活動先は首都近郊の都市レオガンの看護学校に決定。市内の医療施設がまったく機能しておらず、発災から5日がたっても、海外から何の支援も入っていないかったのだ。

18日早朝、看護学校前の広場に診療テントを建てたJDR。「やっと助けが来てくれた。早く診て

くれ！」。敷地はフェンスで囲われていたが、その外の避難民キャンプから数百人が押し掛けた。これほどまで、重症患者が多いとは。まずは、緊急性の高い人を優先することを決断せざるをえず、初日は30人しか治療できなかった。「ここまで来てこれしかできないのかと悔しくて仕方なかった。そんな状況とは裏腹に、夜は満天の星が輝いていた。

何日たっても、JDRの活動サイトの周りは重傷患者であふれ返っていた。骨がむき出しになっている男性、傷が化のうしてうじがわいている少女、顔面の皮膚がめくれ上がり、片目を摘出しなければならぬ女性。日本から持ち込んだ資機材では大規模な手術ができなかったため、他国の軍やNGOなども協力しながら懸命に治療が行われた。

そんな中、現地の看護学校の生徒たちがボランティアで通訳を買って出てくれた。「症状を聞くのに言葉は必要不可欠。患者さんのほとんどが現地語しか話せなかった。彼女たちの存在は本当に頼もしかった」と、独立行政法人国立国際医療研究センターの室田力看護師は振り返る。また治安状況の悪い中、スリランカの国際連合平和維持活動（PKO）部隊は24時間体制で警備をしてくれた。いろいろな人の力が合わさった支

援活動。それはすべて、患者さんの「痛み」を和らげるため、そして彼らの笑顔を見るためだった。JDRは8日間で延べ534人を診察。自衛隊部隊に活動を引き継ぎ、帰国の途に着いた。「最後の3日間は、自衛隊の医師たちと活動することができ、カルテなどの引き継ぎができました。『後は任せろ』とタスキをつなぐ気持ちでした」と畑医師は話す。出発から帰国まで、隊員が一丸となり全力疾走した2週間だった。

被災地の人々の最後の「岩」ともいえる国際緊急援助。これまでになく重症患者が多かったハイチでの活動の教訓から、JDRはクリニックからホスピタルへの移行を検討。診療テントの中で手術ができるような資機材をそろえ、訓練を始めているところだ。

そして今もハイチでは、JICAによる復旧・復興支援が続けられている。JDR帰国後の2月には、国際機関の合同ニーズ調査に参加。そこで得られた情報を基に、国家の中長期的な復興計画の策定を支援した。さらに住民の生活再建に向けて、レオガン市内の学校に共同水栓などを設置。道路や給水網などのインフラ整備にも着手している。地震からもうすぐ3年、そのつめ跡に立ち向かう人々に寄り添い、新たな国づくりが進められている。



ボランティアとして通訳を務めてくれた看護学校の生徒たちと。胸に名前と使用言語のワッペンを付けるなど、スムーズに連携ができるように工夫した



【右】最後の3日間、自衛隊部隊と活動を共にすることで、患者の症状や資機材などの引き継ぎをスムーズに行うことができた
【左】日本から持参した折り紙や風船で現地の子どもたちと触れ合う隊員たち。被災者のこころのケアも重要だ

